

今回は、「なごや会」の会報で発表された川上正信さんの原稿を本人に加筆して頂き「ろくおん通信」に掲載させていただきました。

当初は2、3回に分けて掲載を考えましたが、まとめて一回で掲載することにしました。これまで音声訳について、利用者の意見などを聞く機会はあまりなかったと思いますので、この紙面で紹介させていただきます。

録音図書の質的向上をもとめて！！

横浜中央図書館 川上正信

■はじめに

私の学習や娯楽のための読書の大半は音訳に頼っている。これが日増しに増えているように思える。それだけ、録音図書が、視覚障害者の情報入手に欠かせないものとして不動の地位を占めていることになる。今でこそ、商業ベースで作られる物もあるが、録音図書の多くは今日においてもボランティアの献身によって作られていることは言うまでもない。機会を捕えては熱心に講習会に通い、少しでも質の良い録音図書を作るため、事前の下調べに東奔西走しておられるボランティアの方々を見るにつけ、読者のひとりとして頭が下がる思いである。録音図書作りの難しさを痛感させられる毎日でもある。

音訳者の批判を恐れずに私の持論を述べさせていただければ、いくら正確さを追求し、下調べをして正しい読みがわかって、また、頭で目指す読みが理解できていても、それを、読者に聞きやすく、聴覚で理解できる録音図書に仕上げることは別である。全国から多くの録音図書を借りて読むが、どうしてもこのように音声訳の質の悪い、読みに難のあるテープに遭遇する。なぜ、蔵書として不特定多数の利用を前提としていながら、このような見劣りするテープが流通しているのだろうと思う。2～3分でも、私には聞くに堪えないテープがある。数が増えた分、良いテープにめぐり

会うことが少なくなったということだろう。質的側面を軽んじてきた結果の現われだろう。1冊でも多く作りたいという、図書館側の意識が、音訳者の募集や研修の甘さになって現れ、その結果全体として質に難のあるテープの割合が増えてしまっているのではないだろうか。また、読者自身が質的側面より、1冊でも多くの図書を提供を望んできたということも否めない事実だろう。

難しい点字表記を学んで、数年を経てやっと一人前の点訳ができるというのとは違って、「声」が出て、ある程度の日本語が読めれば、“音訳ボランティア”はできると素人は考える。全国視覚障害者情報提供施設協会が発行している『はじめての音訳』（視覚障害者介護シリーズ2）でも、「たくさんの音訳図書を製作するためには、ひとりでも多くの音訳者が必要なのです。」（P17）とひとりでも多くのボランティアへの参加を呼びかけている。果たして、音訳は、声に出して読める人ならだれでもできるような簡単な活動であろうか？ 私は、強く否定したい。音訳に対する世間の誤った見方を変えようと、講習会参加の動機付けに苦労されている図書館が存在していることもよく承知している。「なのに」である。

私は、よい録音図書を提供していかなくてはならない立場に身を置いている。決して一利用者ではないから、それだけ厳しい見方・聞き方をしていることは間違いない。私自身、録音図書の作られ方や質的低下にいささかの不満を持っており、基本的なことだけに危惧を抱いている。古くて新しい問題である。点字による修得が難しく、録音図書に大きく依存する中途視覚障害者の比率が高くなった今日、こうした人びとの読書や学習・調査研究に耐える録音図書になっているだろうかという点である。表意文字で書き表された日本語を、「音訳」という手法で、どこまで聴覚で理解できる録音図書が可能かということを追求してみたいと思っている。言い換えれば、表音文字とも言える音訳の限界はどこにあるのだろうか、音訳表現で理解できるのはどこまでなのだろうかというつきない興味である。ところが、これまでの録音図書の作り手である音訳者や指導者に、そうした基本理念や考え方、それを可能にするためのノウハウがあるのかどうか私は知りえない。そこで、以下、簡単に現状と課題について述べさせていただきたい。

■録音図書の現状と改善策について

では、私が現在の録音図書をどのように受け止めているか、そして、「これだけは改善されたい」という切なる思いを記してみたい。逐一記すことは紙数の関係で無理なので、顕著に表れている現象のみを記して、その改善策を探してみたいと思う。

ちょうど、この原稿を書く直前に、音訳技術を象徴しているとも言える二つのテープを聞いた。話題の、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』（J. K. ローリング作）と『13階段』（高野和明著）の二つの小説を読む機会があった。前者は、力不足のために、読みに難があるためスムーズに内容が頭に入ってこないのだ。文節ごとに機

械的ともいえる息つきをしているため、生きた文章としての流れがないのである。書かれた文字をただただ追っているかのように私には感じられた。また、登場人物の違いを音声表現で言い変える技術が乏しいために、誰のセリフか時おりわからなくなってしまふことがよくあった。残念ながらすぐに返却してしまった。これに反して、後者は、読み手の存在よりも、作品の中身にぐいぐいと引き込まれていっきに読み終えてしまい、読後感のよいものであった。第三者が前面に出てこないというか、作者の意図を十分熟知した読みであり、優れた表現力の持ち主であったためだ。

○利用者は受身でしかないのか？

録音図書の作られ方について、利用者はまったく受身である。意見をはさむ余地はほとんどないのではないだろうか。「〇〇の音訳は聞きづらい」と読後感を述べた利用者がいたとしよう、それがそのまま音訳者に伝えられているかは甚だ疑問である。技術が未熟なためにその職を退いたという話は聞えてこないことからわかる。読みが適切か否かは、その全てが校正者又は、図書館側に委ねられている。利用者は、音訳について専門的知識をもっていない上、原本と照合して読みを確認することもできない。音訳者が読んだ（あるいは読まなかった部分）すべてを信頼していなければ読書ができない。しかし、聞き手は、“優れた教師”である。利用者の「生の声」を、全国の製作に関わる指導的立場の人、図書館で指導にあたる人が共有できるシステムがほしいものである。

○利用者自身が1冊でも多くのテープが製作されることを望んできたという事実

利用者自身が、読みの完成度の高い録音図書にこしたことはないと思いつつも、1冊でも多い図書から情報を得ることを優先してきたことにも、今日まで問題を引き伸ばしてきた要因がある。地域のボランティア団体が利用者との懇談会を開いて利用者の生の声を聞きたいと企画しても、「いつも、貴重な情報を提供してくださり感謝の気持ちで一杯です」といった趣旨の応えしか返ってこないとよく耳にする。ボランティアは、率直な利用者の意見を聞きたくて懇談会に望んでいるが、利用者は、日ごろの感謝の気持ちを伝えたくて参加しているのである。参加意識にギャップが大きい。地域活動だけになかなか思ったことを言えないということもあろう。こんな所にも、利用者の受身の姿勢がみてとれる。

○淡々と読むことが、聞きやすい図書づくりに欠かせないポイントであるという考え方

20数年前、それまでの「朗読」という名称や手法は誤ったものであり、視覚障害者のための録音図書作りにおいては、「音訳」（又は音声訳とも言う）とするべきという考え方や手法が指導的立場にある関係者から提起された。この考え方の基礎には、

「音訳」に欠かせない点として、①声色を使ったり、音訳者自身の主観は極力避けて読む、②音訳者自身の言葉は、必要やむを得ない時にだけ許されるものであって、ともかく原本に忠実に読むことを旨とする考え方であった。

この時点から、音訳者の間に大きな誤解と迷いが生じてしまったのではないかと思っている。“感情は極力避けて、淡々と読むいわゆる平板読みが提唱された”ことで生じた誤解によって、文章を、“意味”の組み立ての視点で読むことを否定されたかのように、音訳者は理解してしまったのではないだろうか。指導者自身がそのように解釈し、指導にあたるようになったのである。「朗読」のもつ基本が否定されたと解釈した音訳者は、ただただ淡々と文字情報を音声に変換していけばよいと理解したのである。この考えが、文意をきちんと捉えて読むことやセンテンスの自然な流れを大事にする読みが理解されてこなかった原因のように思える。朗読の基本的技術が身につけてこなかったことは残念である。平板読みを守り通している音訳者の読みは、聴覚で文章を理解する際の妨げになっている。全ての語句が立ってしまっているのです、私の耳には刺激が強い。作者の付けた読点に拘ると、読者は、なかなか「文意」を正しく捕らえて読み進むことができない。結果、テープを何度も止めて聞きなおすことになり、なかなか快適な読書ができないのである。（告知文と文芸作品とでは多少読みが異なることはむろん承知の上である）

○聴覚での確認作業が皆無であることについて

周知の通り、「音訳」の技法で1冊の資料を読む場合に、読みの正確さに加えて、“表意文字として書かれた文章”と、図・表・グラフ・写真等のビジュアルな視覚情報を、音声表現を駆使して伝える技術が重要な要素である。現状は、“漢字仮名混じりの文章を、目で追っている読み手”と、“聴覚で理解していこうとする聞き手”

（送り手と受け手）との間には、相当のギャップが存在していることを知っていただきたい。同音異義語はもちろん、新語や造語の多用、グラフィックな表現方法の増加が端的な例であるが、どのように説明してほしいのか、どのように読めば聞き手が少しでも理解できるのか、どんな読みをしてしまうと、文意が掴めないのかなど、聞き手の立場になって基本的な部分だけでも合意しておかなければいけないだろう。自己流の読みに陥るのが怖いことは、音訳者自身がよく知っている落とし穴である。長期にわたって、聞き手が受身であり続けた結果である。繰り返しになるが、利用者の声を館界で集約して、指導的立場にある人や音訳者に全国的レベルで伝えていけるようなシステム作りが必要だろう。

これと同時に、いま、すぐにでも始められることとして、音訳者自身が聴覚のみでテープを聞くことの重要性が上げられる。視覚での読書と聴覚での読書の相違を探求する作業である。このカテゴリーが、現在の音訳講習会のプログラムに組み込まれているという話を聞いたことがない。音訳者に聴覚訓練を課することは酷なように思え

るが、原本を見ながらでの校正では、このことは身につかないのでしかたがない。聞きづらいテープや、聞いて理解できない、わかりにくいテープとは、どのような要因が重なった時に生じるのかが、この作業によって容易に理解できることである。障害者が街を歩くことの困難さを少しでも理解するために、車椅子体験やアイマスクでの歩行体験をするのと同じである。そう簡単ではないし、時間もかかる。でも、この作業を繰り返し行うことで、利用者の立場に身を置くことで、少しでも聴覚の特性を理解できるのである。

○確立した音訳指導法と、高い技術指導者の不足

音訳ボランティアの養成は点字図書館、公共図書館、社会福祉協議会、カルチャー・センター、地域のボランティア団体等で盛んに行なわれている。図書館職員自らが指導にあたっている所もあるが、大方は、キャリアを積んだボランティアが指導的立場を担っているケースが最も多いのではないだろうか。キャリアを積んだボランティアが後輩を育てる形で新たな指導者に引き継がれているのが実情だろう。しかし、音訳技術には、①文章理解や声の出し方を含めた、朗読としての基本と、②漢字・記号・符号・注釈の処理、③図・写真・表・グラフ・地図などのビジュアルな情報の処理、④同音異義語や聴覚での理解を助けるための文字の説明など、漢字の処理に関する技術、⑤調査技術、⑥録音機器操作、⑦校正技術など非常に多岐にわたっている。それよりも、何よりも音訳者には、日本語についての知識、読解力、表現力、集中力、判断力等が、どうしても求められてくることは否めないだろう。それらのある部分は研修会の中で身につくのだが、日本語についての知識や読解力等は資質に属するもので、すでに培われたものである

上記の七つの技術のうち、私は、①だけは、プロフェッショナルな専門家の領域に当たるので、困難とは思いますがこの種の専門家が担う必要があると思っている。NHKのアナウンサーが私たちの活動に関心を持ってきているのは将来に向けて心強いことである。朗読のポイントさえきちんと掴めば、どんどん上達するボランティアの方は多くおられると確信している。また、他の六つの技術についても、ひとりの指導者が、体系的に指導にあたることはなかなか困難なことであるし、なによりも、どんな人にどこまで、どんな方法論を用いて指導していくのかといった指導内容と指導法の標準化と体系化がなされていないのが実情である。指導法の体系化と一定の標準化を急ぎたいものである。その際、利用者の参加が不可欠なことは言うまでもない。

○音訳者と、指導者のための技能検定制度の必要性

どんな人 = 募集・採用、どのような方法 = 指導法で、どこまで知識と技術 = 指導カリキュラムを身につけてもらうかということがきまれば、次は、だれが指導にあたるかということが明確になってくるのではないだろうか。指導者としての

適性も自ずと明確にならざるを得ない。

音訳をめざす人たちへの技能検定のプラス面の効果についてどんなことが挙げられるだろうか。ときおり聞かれる言葉だが、「ボランティアは、自発的意思で行うものであるから、ノルマを課したり、試験によってランク付けをするのはいかなものか」という議論である。音訳者自身は、はたしてそのように考えるのだろうか。大変興味深い事柄である。私の調査では、必ずしも上記の意見が大半を占めているとは言えないことがわかってきている。前述したように、たしかに、図書館という公的機関における活動であっても、その大半は無償の奉仕活動に依存しているのが実情である（一部、謝金や交通費が支払われている例はある）が、私は点字図書館においても、ボランティアの高齢化に伴う活動の停滞から、若い人が職業として関われる道筋をつくっておく必要性を感じている。日本語についての知識の希薄なことを除けば、若者には限りない可能性がある。なぜ、これまで職業として音訳が定着してこなかったのかがむしろ不思議なくらいである。利用者としても反省すべき点を感じる。

もう既にご理解いただけたと思うが、視覚障害者への「情報提供」という任を担う音訳に関わる者は一定の知識と技能を認定した人に担ってほしいと考えている。1級・2級といった具合に、指導者と一般音訳者とに分けてである。音訳者に必要な最小限の知識・技能が判定できればそれでよいと思っている。技能検定を行なうメリットとしては、①音訳技術が、これまで以上に研かれ、一定の技術水準に達する、②音訳を目指すボランティアに一定の目標を明らかにすることで、音訳の標準化が進む、③行政や企業・学校などが仕事として音訳を依頼しやすくなる、④利用者が、その必要度や緊急度に応じて、音訳者を選択できるようになる、等が挙げられよう。技能検定によって、音訳を仕事として確立していく方向性も見えてくるだろうし、仕事として成り立つことになれば、音訳が社会一般の耳目を集めることにつながるだろう。技能検定制度の目的は、言うまでもなく、音訳技術の向上と標準化にある。

■おわりに

音訳者の高齢化もかなり進んでいる。21世紀はだれが音声訳の作業を引継いでいくのかを考えると私はある種の不安を感じる。若い人がこの世界に入ってこられるシステム作りをしておかないとこれまでの状況を変革することはおろか、いつまでたっても、音訳が一般社会に認知される仕事になりえないと考えている。国民の高齢化とともに、一方で「朗読」なり「音訳」なりを求めてくる時代は必ずくるはずである。その時期は、そう遠くないと思う。

また、利用者が“受け身の読書や学習”から、“選択できる（契約に基づく）読書”も、ひとつの選択肢としてシステム化されているような社会でありたいと思う。ここで、誤解されては困るのだが、私は、ボランティア活動を否定するつもりはまったくないことをお断わりしておきたい。ここでは詳しく述べる余裕がないが、公的機関

と地域に根ざしたボランティアの担う活動は違ってよいと思っている。利用する立場から言わせていただければ、同じ音訳とはいえ、求めたいことが異なるからである。この両者の担う範囲や責務を、図書館関係者、音訳に関わる人々、そして利用者が理解を分かち合えば、新たな選択肢が生まれるだろうと思っている。関係者のご理解をいただきたい。私の拙文についてご批判・ご意見を仰ぎたいと思う。

E-MAIL: kmasanobu@mx6.ttcn.ne.jp

Q ソニーのTC-RX1000Tの製造中止は本当ですか？

A 前回の『ろくおん通信』の記事で、今年の秋にもTC-RX1000Tの製造中止があるかもしれないとの話をしたことから、いろいろな方からご質問をいただきました。最終的にはどうなるかまだはっきりしていませんが、ソニーが後継の機種を製造をする可能性もあるようです。

しかし、これまで問題になってきている

- ①購入したばかりでも雑音が入る。
- ②回転が微妙におかしい。

といった問題が解決されるのかどうかはわかりません。

Q リハ協から配布される、ノートパソコンなどで録音ができるソフトはいつ配布になるのでしょうか。10部以上欲しい場合はどうしたらいいのですか？

A すでにリハ協からは希望されたところには配布する旨の連絡はいつているようです。時期ははっきりしませんが今年度中には配布がされると思われます。ソフトは事前に申し込みのあったところに、最高10部まで配布されることになっていますが、10部以上使用する場合は、コピーすると違法になりますので購入する必要があります。このソフトはシナノケンシからPTR1を購入した場合に添付されるソフトとほぼ同様のものです。ソフトだけの販売価格がどうなるかはまだはっきりしていませんが、近くその内容もあきらかになるとおもわれます。

利用者から製作依頼を受けている原本

『新・良妻賢母のすすめ』 ヘレン・アンデリン著 岡喜代子訳<人生訓>

『教会と現代社会 神学 』

『マンション管理士管理業務主任者』 マンション管理法令研究会著<商業経営>

※この本は共同製作可能の本です。グループでの製作を募集します。

『笹百合』 森山 陽子著<雑著>

『イチローのメンタル』 豊田 一成著 <スポーツ>

『福祉住環境コーディネーター3級過去問題集』 渡辺光子著<>

→引き受けていただいたグループ

『大東亜戦争の実相』 瀬島龍三著<政治>

ICCB

『デリシャス 1月号』

グループいすみ

デージー編集者募集します

盲人情報文化センターではデージー編集者を募集します。定員は若干名。講習はマンツーマンで行います。講習終了後は盲人情報文化センターでデージー図書の実成が可能な方です。パソコンをお持ちの方は歓迎します。

希望者は録音製作係までお申し込みください。

申し込み方法： 電話または来館

講習期間： 週1回程度 半日～一日（本人の状況により）

定員： 若干名

内容： 盲人情報文化センターで製作した録音図書のデージー編集